

メッセージアウトライン マタイの福音書9：1～8 「どちらが易しいか」

[1]「イエスは舟に乗って湖を渡り、自分の町に帰られた」

イエスと弟子たちはガリラヤ湖の東のガダラ人の地へしばらくの休息のために舟に乗って行ったが、そこで彼らを出迎えたのは悪霊につかれていた二人の男であった。イエスは彼らから悪霊を追い出し、悪霊はそこで飼われていた豚二千匹に乗り移り、その結果、二千匹の豚はガリラヤ湖になだれを打って飛び込み、溺死したのであった。この出来事のため、町中の人々はイエスに立ち去ることを願った。彼らは二人の男が正常な市民生活に戻れたことよりも豚の死による経済的損失を重視し、世の救い主であるイエスを喜び迎えるということをしなかった。ここにこの世は救い主を歓迎しないという、すべての人間が持つ罪の性質の原点を見るのである。そのためイエスの一行はそこから舟に乗ってまたご自分が伝道の根拠地とされていたご自分の町カペナウムへ帰られた。

[2]「すると見よ。人々が中風の人を床に寝かせたまま、みもとに運んで来た。イエスは彼らの信仰を見て、中風の人に『子よ、しっかりしなさい。あなたの罪は赦された』と言われた」

カペナウムにはペテロの家があり、以前そこでイエスはペテロの姑の熱病を癒されている。→マタイ8:14~15 イエスはここにしばらく滞在されたのである。それでイエスが戻って来られたことを聞いた多くの人々がまたイエスの話を聞こうとして集まって来たのであった。するとそこに一人の中風の人が床に寝たままイエスのもとに運ばれて来た。ここだけではわかりにくいですが並行箇所のマルコ2:3~4を見ると次のように書かれている。→

「すると、人々が一人の中風の人を、みもとに連れて来た。彼は四人の人に担がれていた。彼らは群衆のためにイエスに近づくことができなかったので、イエスがおられるあたりの屋根をはがし、穴を開けて、中風の人が寝ている寝床をつり降ろした」

彼は動くことができないほどの重病であった。そこで友人か家族か分らないが四人の人によって寝床のまま担がれて連れられて来たのである。やはり並行箇所のルカ5:18によるとこの人たちは男であったことが分かる。しかし、そこには多くの人々が詰めかけており、家の中に入ることもできなかった。それで彼らは帰ることにしたか。そうではない。彼らはあきらめなかった。彼らが採った方法はその家の屋根に上り、イエスがおられるあたりの屋

根をはがして穴を開け、病人が寝ているままの寝床をつり降ろしたのである。それだけ彼らはこの中風の人をイエスに治していただきたいとの信仰による思いが強かったのである。

当時のユダヤの家は日本の家のように天井があって傾斜が着いた屋根があり、その上に瓦が乗っているというような構造ではなかった。ユダヤの家は屋根は平らであり、屋根イコール天井であった。それゆえ屋根をはがせばすぐ下が見えるという構造になっていた。これもパレスチナ地方は雨が非常に少ない気候なのでこのような構造でも大丈夫であったのであろう。

さて、目の前に床に載せたままの病人がつり降ろされて来た時、イエスは彼らの信仰を見て、中風の人に「子よ、しっかりしなさい。あなたの罪は赦された」と言われた。

「子よ」とはこの場合、人に対する愛情を込めた呼びかけである。ルカ5:20では「友よ」と記されている。

[3]「すると、律法学者たちが何人かそこにいて、心の中で『この人は神を冒瀆している』と言った」

並行箇所のマルコ2:7では「この人は、なぜこのようなことを言うのか。神を冒瀆している。神おひとりのほかに、だれが罪を赦すことができるだろうか」と書かれている。

つまり、神おひとりしか罪を赦すことができないのにこのイエスという男は、あなたの罪は赦されたと宣言している。これは神を冒瀆していることだというのである。たしかにそれはその通りであるが、それは相手がただの人間である場合に言えることであって神の子であるイエスにはその理屈は通用しないのである。このイエス・キリストこそ神の子、神から遣わされ、世の人の罪を十字架の死で贖うために、人となってこの世に来られたまことの救い主なのである。

それにしてもなぜ今ここに律法学者たちがいたのであろうか。彼らはユダヤ人の中でも上流階級に属しており、ペテロのような一介の漁師の家に来るようなことは全く不自然なことである。それが今、ペテロの家に来ているということはイエスの説教がよほど魅力的であったからであらうか。確かにそうかもしれないが、じつは彼らがここに来ていたのはある目的で来ていたのである。ルカ5:17には「彼らはガリラヤとユダヤのすべての村やエルサレムから来ていた」と書かれている。イエスの今いるカペナウムはイスラエル北部のガリラヤ地方である。そしてそのガリラヤは言うに及ばず、南のユダヤ、首都のエルサレムからもはるばるやって来ていたのである。これは単にイエスの名声を聞いて来たというだけでなく、四六時中イエスの言動を見張り、何か変な言動があれば揚げ足を取って失脚させてやろうという魂胆があっ

たのである。もちろんこれはユダヤ教の指導者たちの指示によるものであったであろう。

日本でも第二次大戦中、教会の礼拝には必ず私服の刑事がいて、牧師が何か変な言動、たとえば天皇は神ではないなどと言おうものなら、たちまち捕えられて刑務所に放り込まれるということが実際にあった。イエスの回りにパリサイ人や律法学者たちがいたということはなにかそのような出来事を連想させられる。案の定、律法学者たちは心の中でイエスを非難した。群衆がいなかったなら捕えようとしたかもしれない。

[4-5]「イエスは彼らの思いを知って言われた。『なぜ心の中で悪いことを考えているのか。[あなたの罪は赦された]と言うのと、[起きて歩け]と言うのと、どちらが易しいか』」

このイエスの言葉はどういう意味であろうか。罪が赦されるというのは病気が治る以上の大変な出来事である。私たちクリスチャンはこの罪が赦されるということのおかげで神の子とされ、天の国籍を持つ者とされたのである。病気の方は治ったところで天国に入ることはできない。それでこれは当然、物ごとの重大性から考えるならば罪の赦しの方が大変で病気を治す方が易しいと私たちは考えてしまう。しかし、律法学者たちはイエスを神の子と認めていないので、次のように考えたであろう。「罪を赦すと口で言うだけなら何も難しいことはない。どこにもその証拠はいらないのだから」それゆえイエスは彼らの心を見抜いて、彼ら律法学者から見ればより困難で証拠のいる「起きて歩け」と言うこととどちらが易しいかと問いかけられたのである。もちろん、彼らから見れば「起きて歩け」と言うことの方が難しいに決まっている。なぜなら病人が治って歩けるという証拠を示さなければならないからである

それでイエスがここで言わんとしていることは、もしこの中風の人に、起きて歩けと言ってそのとおりにならなかったならば、当然わたしには人の罪を赦す権威はない。しかし、もしこの病人が治って歩くことができるならば、それよりはるかに大変な罪を赦す権威をわたしが持っているということは明らかではないかという論法なのである。

[6-7]「『しかし、人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを、あなたがたが知るために――。』そう言って、それから中風の人に『起きて寝床を担ぎ、家に帰りなさい』と言われた。すると彼は起き上がり、家に帰った」

並行箇所のカラマ 5:25では「すると彼はすぐに人々の前で立ち上がり、寝ていた床を担ぎ、神をあがめながら自分の家に帰って行った」とある。

中風の人には癒された。彼は身動きできないほどの中風であったが、完全にイ

イエスの言葉によって癒された。彼はイエスのところに来る時は四人の男によって担がれて連れてこられなければならなかったが、帰りは自分で床をたたんで、歩いて神をあがめながら帰って行ったのである。そしてこの出来事によってイエスはご自分が病人を完全にしかもその後のリハビリもなしで癒す力を持っているばかりか、人々の罪を赦す力も持っているということを律法学者や群衆たちの前で証明しみせたのである。

[8]「群衆はそれを見て恐ろしくなり、このような権威を人にお与えになった神をあがめた」

神をあがめたのは中風を癒された人だけではない。出来事の一部始終を見ていた群衆も恐れを抱き、神をあがめたのであった。このようにイエスが奇跡を行われる時には、人々が神をあがめるように、そしてイエスこそが神からの救い主キリストであるというしるしを目に見えるかたちとして与えることができるのである。

イエスこそ神からの救い主であり、この地上において罪を赦す権威を持つておられる方なのである。

約二千年後の今日においても人々がイエスに対してとる態度はそれほど変わっていない。多くの人々は家に入れないほど集まって来て、イエス・キリストの話聞くが、やがて感心しつつも潮の引くように去って行く。またパリサイ人や律法学者たちのようにイエスの話を聞き、その奇跡を見ても、彼を否定し抹殺しようとして決めてかかる人々もいるであろう。しかし、イエスにどんなことをしても近づこうとする信仰の人も確かにいるのである。

私たちも集まっては散っていくただの野次馬のようではなく、あらゆる努力をしてでもイエスのもとに近づき、その信仰のごとくなれという言葉聞く者になりたい。

この中風の人は四人の人によってイエスに近づくことができた。それが友人であるか家族であるか分からないが、彼らがイエスというお方ならば癒すことができるという信仰をもって近づいて来たことは確かである。そして彼らは中に入ることができないということであきらめなかった。屋根をはがしてでも癒していただきたいとの信仰による思いをもって行動した。（もちろん屋根は後で修復したのであろう）

私たちも救い主イエスを信じていない人を、この四人の人のようにイエスのもとに連れて行く働きのために用いていただきたいと願う。

全知全能の神ならおできになるという信仰をもって、また聖書のみことばの約束を信じて神のみもとに近づく者になりたい。神は必ずご自身のみこころをなし、世の人々が神をあがめ、賛美するようにしてくださるであろう。